仕事でも遊べる

—安岡章太郎とハシエク・ヤロスラフの短編小説における皮肉と風刺—

カレル大学

ヴェベル・ミハエル

はじめに

チェコの風刺作家ハシエク・ヤロスラフ（1883 - 1923）は『兵士シュヴェイクの冒険』という長編小説のため世界中有名である。さらに、ハシエク・ヤロスラフの数多く（約1200）の短編小説の中も名作がいくつもある。それらを読みながら、安岡章太郎（1920 - 2013）の短編小説を思い浮かべることがあるかもしれない。二人の小説家がこの世の中で同時に3年間しか通っていない。無論、会ったこともない。それらの小説は異なる文化的、歴史的な環境で書かれていたものである。ハシエク・ヤロスラフの場合は1910年代のオーストリア＝ハンガリー帝国であり、安岡章太郎は1950年代の日本である。書き始める動機も相違点の一つであるが、二人の作家の生涯や作品においては共通点がいくつも見つかる。

テーマと方法について

まず、20世紀の状況下二人の人生を思考してみると、驚くほどの類似点がある。ハシエクは第一次世界大戦を、安岡は第二次世界大戦を体験し、戦争（戦後）による影響がその作品の中で表れる。二人とも自分自身で体験したものをもとにして小説を書いていた。

つぎに、それらの作品は風刺とパロディをもとにし、皮肉を使って書かれたものである。時代の苦心談（第一次世界大戦中、または日本戦後の1950年代）を語りながら、ハシエクも安岡も主人公を悩まして読者を笑わせる方法を使用したわけである。二人の作家の文体は時代差でも地理学上の差でも共通点が多いとも言われる。それらの共通点について発表したい。

また、本コンソーシアムのテーマを考慮に入れて、上述の小説家の作品の内容を考察してから選択を行う。分析されていく作品は「はたらく・あそぶ」の概念から解析してみたいと思う。ハシエクと安岡の小説の中で、仕事と娯楽がよく混合することがある。そして、その話の流れにおいてどちらが「はたらく」、どちらが「あそぶ」のかはたまに言いにくい。どちらにしても主人公の労働や努力は実を出さないことが多いが、それこそが風刺を産む。

目的と結果

本発表は異なった時代、状況、国、国籍、社会雰囲気や文化影響から出身した二人の作家の作品の共通要素の紹介を目的としている。その比較結果から、世界中であろうと人生そのものは人間の唯一な体験だとわかると期待する。

関心作品（予備選択）

安岡章太郎作『愛玩』『剣舞』『ガラスの靴』『ハウス・ガード』『陰気な楽しみ』

ハシエク・ヤロスラフ作『ハムスター事件 Aféra s křečkem』『信用できる営業 Reelní podnik』『精神医学上のミステリー Psychiatrická záhada』『慈善 Dobročinnost』